平家物語

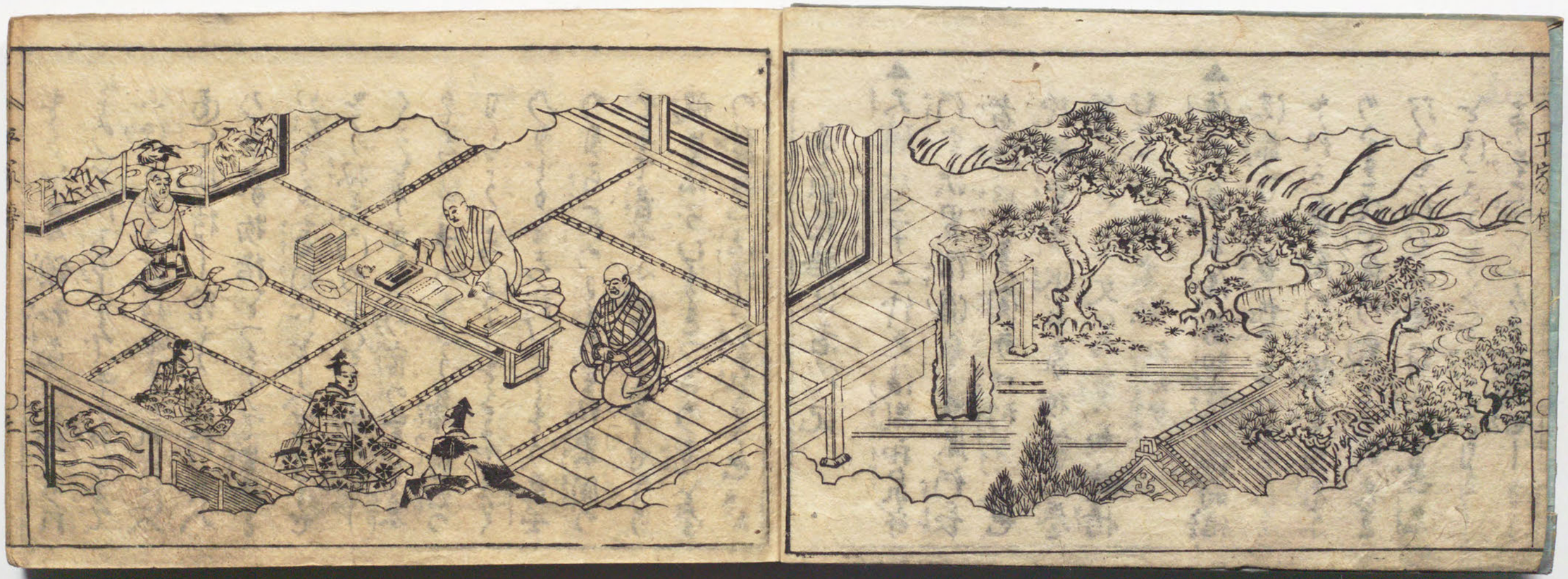
W
913.434
H51

平家物語作者傳記

▲大職冠二子こ作之後亂。和氣寺行宗沢男。信濃寺藤原行長者。博學多聞弁口利才人也。於洛東吉水。平家物語十二巻筆作之。是文篤實而。感情むせび袖を絞ト書き詞花抄

▲徒然草云。後鳥羽院の御時信濃前日行長。拙そ古のわまれをきれう。楽府の山論家の書ふうさまこて七徳の家とみちをきはりもれむ。五徳冠者と異名とぢこさよをくとぶらくさりみ事。その間とすくく。面世ーちくく

810/349
R
岡山大學附屬圖書館
012609
昭26. 3.月 2.日



きくと。惣鎮和尚一ゑもあれ
このとゞ。ものまでこんたをまで。
ふゆまをきせ。ぶをまぶ。此仏法へ
道を持ち給もうけ行長へ
ゐ平家物語をつくりて。生佛と
いひける盲目にとゝへてうこせ
きり。坂山門のひとゝふゆくし
くうきり。九郎判官の事を。蒲冠者の
ゐきりて。事のをこりをゝ。多く
ひりどもをもちひ。武士
のひら馬のこゝぶ。生仏東国の
ゐきて。武士ふ四ゆくうこせきり。
假生仏ふ山きをつさの色を。今
の琵琶法師ハ是ゐ也云云

▲帝王系図

平家円世之天子記之

人皇七十七代諱雅仁久寿二年即位嘉應元年出家法諱行真建久三年三月十三日崩聖寿六十六歳

●後白河院

御在位年号保元三年

比皇子左ニ記ス外稲有之

後白河第一皇子諱守仁永万元年七月九八日崩聖寿二十三歳

●二條院

七十代

御在位年号平治一 永暦一 應保二 長寛二 永万一

二條院太子諱頼仁安元年七月十四日崩聖寿十三歳

●六條院

七十九代

御在位年号仁安三

●茂仁親王

高倉宮治承四年五月平家討之

●道尊

安井宮大僧正御連枝多ハ記之

▲平家系圖

女三宮

式子内親王

賀茂齋院

哥仙

諱憲仁 養和元年正月十四日崩 亜壽

八代 高倉院 九歳

御在位年号

嘉應二 養安四

安元二 治承四

高倉第子愛ニ記スル、人孫攝有之

高倉第三皇子 諱 詳仁

八十代 安徳天皇

文治元年三月廿四日 西海ニ沈ム 亜壽八歳

御在位年号

養和一 壽永二

高倉第三宮 二品

後堀河院御父也 諱号

八十代 後鳥羽院 隠岐国ニ崩ス 坐壽六十歳

御在位年号

元暦一 文治五 建久九

円第四皇子 諱 尊成

延應元年、月九二日

守貞親王 後高倉院

清盛

桓武天皇十二代 別尺忠盛嫡子 太政大臣従一位

養和元年壬二月四日薨 六十

清盛公嫡子 小松内大臣従一位

治承三年八月薨 四十三

重盛

安芸ノ守 宇治川ニテ流死

基盛

子息行盛ダンノ浦ニテ入水

八嶋ノ内大臣 江列ニテ誅ス

宗盛

中納言ダンノ浦ニテ入水

知盛

本三位中ノ将都ニテ誅

重衡

三河守 クリカラ軍ニ討死

知度

淡路守

清房

門脇中ノ言 長門ニテ入水

教盛

久安六年死 二十六

家盛

後理大夫 ダンノ浦ニテ入水

経盛

池大納言 東国ニ下向

頼盛

此二子孫タヘシ

サツノ守 一谷ニテ討死

忠度

但馬守 一谷ニテ討死

経政

平家系
若狭守一ノ谷ニテ討死
經俊
大夫一ノ谷ニテ討死
敦盛
教盛一男越前三位一ノ谷ニテ討死
通盛
ダンノ浦ニテ入水
教經
中納言リヨリレ流罪
忠快
クラノ大夫一谷ニテ討死
業盛
宗盛室
女子
成經室
女子
花山院右大臣室
女子
安德天皇母后
建礼門院
女子
建久二年御カクレ 四五
六条摂政室
女子
冷泉大納言室
女子
近衛基通公室
女子
修理大夫信隆室
女子
後白河更衣
女子
侍従
清邦
知盛一男武蔵守一谷ニテ討死
知章
加賀守
知忠
有房室
女子
宗盛一男右衛門督
清宗
父ト内誅
アハノ守フクレヤウ
実宗
後ニ能
重盛一男三位中将クテノ、沖ニテ入水 九七
維盛
板原本卿
小松 塩崎等ノ祖
新三位中将ダンノ浦ニテ入水
資盛
長崎
織田ノ祖
左中将ヤナギガ浦ニテ入水
清經
新少将ダンノ浦ニテ入水
有盛
女子
六代
文覚ト子誅
女子

源氏系圖

清和天皇八代美家四男従五位上
六条判官保元々年誅
為義

- 丹後侍従 **忠房**
- 備中守一谷ニテ討死 **師盛**
- 土佐守 **宗真**
- 勢観房ト号ス浄土宗開山円光大師ノ高弟双ノ智者ナリ **源智** 知恩寺知恩院ノ才二世

下野ノ左馬ス正四位下贈内大臣正三位
平治三年尾州内海ニテ害三十三
義朝

- 帯刀先生 久寿二年誅 **義賢**
- 頼政養子六条蔵人 **仲家** 宇治合戦討死
- 志田三郎後三条経ニ内意 **義憲**
- 左衛門尉保元乱ニ誅 **頼賢**
- 掃部助右馬誅 **頼仲**
- 加茂六郎右馬誅 **為宗**
- 七郎右馬誅 **為成**
- 父ト内死 **仲光**
- 木曽朝日将軍江州粟津ニノ討死 **義仲**
  - 中比ハ石友ノ智木曽ハ美濃仲ヨリ光二代ノ末也
  - 清水冠者 **義重** 東国ニテノ誅
- 鎮西八郎古今ノ豪将ナリ伊豆ニテ生害成三支実ハ琉球ヘ赴ク今彼国ノ天子ハ為朝ノ末ナリ為朝リウキウ(琉球)ノ後文章言語三ナ日本ノ如ク学ブ今ニ如此 為朝子孫アリ云々 **為朝**
- 悪源太ト号ス美朝ノ四男ナリ平治二年ニ誅セラル兄双ノ智ナリ 中宮進 美濃ノ墓ニテ生害 **朝長**
- 平治二年ニ誅セラル兄双ノ智ナリ将ナリ死後ニイカヅチト成テ平家ノ侍ノサキ殺ス **義平**
- 源九郎 保元乱ニ誅 **為仲**
- 征夷将軍 右大将 正治元年薨五十三 **頼朝**

十郎蔵人備前守文治二年討死
此子孫クノニ多シ
行家（ユキイエ）

アハヂノ冠者　平家ニ誅セラル
義久（ヨシヒサ）

加茂ノ冠者　平家ト戦死
義次（ヨシツグ）

土佐ノ冠者　土丸ニテ誅セラル
希義（ヨシヨシ）

三河守　建久四年誅セラル
範頼（ノリヨリ）　吉見ノ祖

武蔵野禅師　建仁二年ニ誅セラル
人々成（ヒトビトナル）

美濃和元年　義乃ニテ討死
義国（ヨシクニ）

伊与守　従五位上古今ノ名将
義経（ヨシツネ）　文治五年奥州衣川ニテ生害三十一ニ云世人義経ハ衣川ヲ道レテエゾ島ヘ渡ルト云ハ非ナルベシイニ秀衡ガ方ニヲハセシ時エゾヘ至ラフナリ義経生害ハ衣川ト云説分明ナリ

平家物語巻第一同源義大将

初丁
▲祇園精舎のこゑ

祇園精舎ノ鐘ノ声諸行無常ノ響アリ娑羅双樹ノ花ノ色盛ナル者モ必ズ衰ヘノ理ヲアラハスト云ヘリ奢レル人モ久シカラズ只春ノ夜ノ夢ノ如シ猛キ者モ遂ニハ滅ビヌ偏ニ風ノ前ノ塵ニ同シ遠ク異国ヲ尋ネ近ク我朝ニ聞ク所ノ人ノ栄ヘ盛ナルモ皆ナ悉ク一日ニ亡ヒ去ル事ヲ

二丁
▲唐土の秦始皇

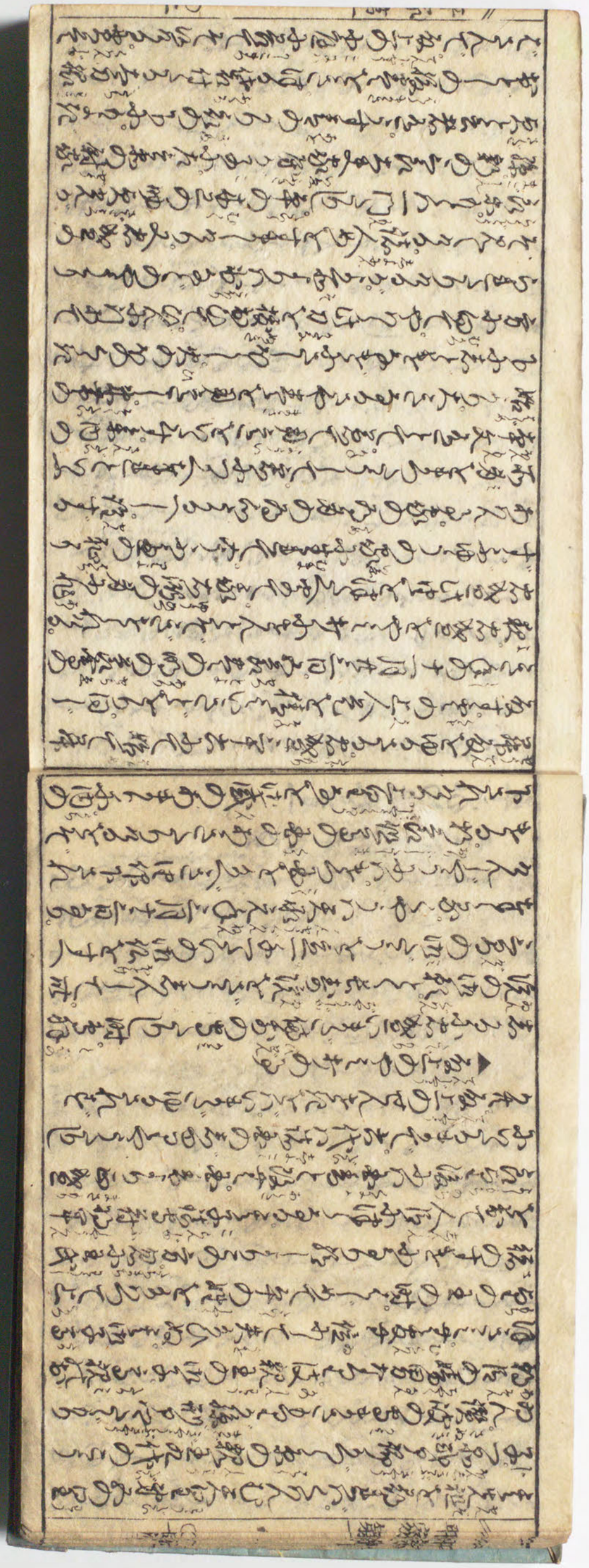
唐土ニ秦始皇ノ始メテ天下ヲ治メシ時ハ不老不死ノ薬ヲ求メテ海ヲ渡リ蓬莱山ニ入リ給ヒシカトモ遂ニ其験ナシ漢ノ武帝ノ時ハ李夫人ノ面影ヲ慕ヒ給ヒシカトモ其ノ姿ヲ見ル事ナシ

三丁
▲すぐさのり

李夫人ハ絶世ノ美人ナリ武帝ノ寵愛ヲ蒙リ給ヒシカトモ病ニ臥シテ遂ニ空シクナリ給ヒシ時ハ帝ノ宣ヒケルハ其ノ人ノ面影ヲ今一度ノ対面ヲ願ヒ給ヒシカトモ其ノ姿ヲ見ル事ナシ

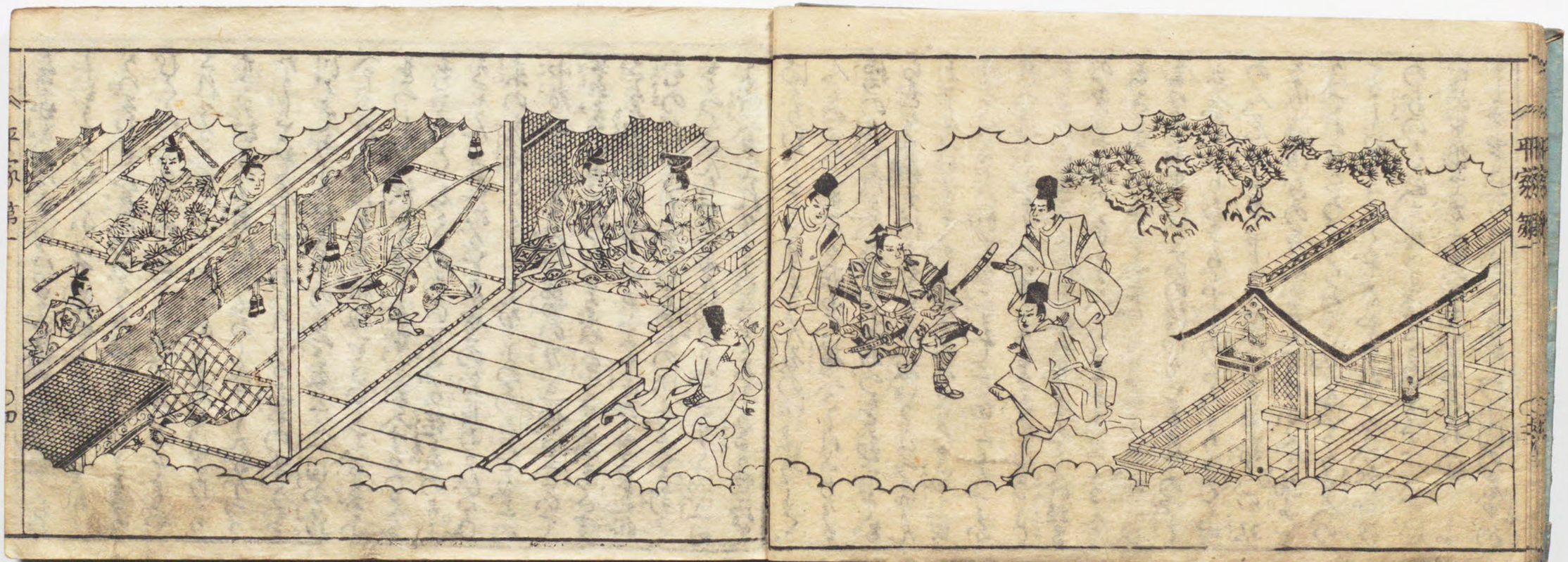
七丁
▲かぶろ

李夫人ハ生ケル時ハ美人ノ誉レ世ニ聞エシカトモ死シテ後ハ其ノ姿ヲ見ル人ナシ



いぎどあやしくこそおぼえけれ。うかはなり問はせ給へ。
つるのをぢ、やうの者のいはんずらんぜ
ぞとこそうけたまはれ。古侍とおぼえて云
をしれうりをれば、あるうりおうなの云てやうるは、おのの
をぢ、ものとぶらひてきたりんやうとぶんとそうして
ゆるりえんしておまうづとそみえてぞいまする。
そもおとうとこそやらはれたりんぞ。和のつ
付おうりうりたるうりたるうりおうなは、おのの百ふまつれを
ふかくこ物をとうて、俗をたのしかすべあな
ひとりとそてこそやられうるうをもくをとこ未もひ
人くはいつるふのおらものは事とはやあぐ。
中はちをかの位ひとうとうとうとうとうとうとに
のこうまひあていものあふ位ふ源うり
しうびこうふの思ひ物をそいをつい
とぞこそやされうるこまとんあるこの月のすぐ
まれうりうるおふこそ。ひいくやされ
ろうるまたおいうわすべさやうもみく
ては拾をいまうこ統らざるこれふはおを

はゆうりあうくとそ。ちんあのれ後あうく。
人この人こまうるおそ横へこれうりうる
獨の力とはもあつうふあづをもてそ
らまうるあをれるうをもてはいうはゆん
とやうれはうはこまはこうはまこれたちうこ云
はゆうれうはいはてあとまそこ切よてんげふ
若のはくこまーわをそうるのるのとし
ぞこうこはらまこうるあれはわすやう候福
の身まとこのをとうこはいうるをのちくうんど
云さまはくうふあはうとのくれうこひ
まうくふやはこうはのうまうこのうとそ
云人ふこまりわまりおうこのうりうれそは
の人若神とそやうるぱ人いうこ郎人のは
るは付はおのうふまりまこうるふんこ柏おと
うでわるくうくうこさはこいうるる人の
うーぬりうんとぞくやこやられうる。死ひ法
のおのを汲大臣こはこうこいまこ十郎おし
時父中綱をおふのうふとをおひてこうる
しるをそおりうるとおるのれ門の義中納



云ふ事あの殿ばらはいまだ揚たのちかておハ
しまさるべしこふ申てそやうふりてゐられし
うゐ。そもをゐ。おハ。ぐり。ハ。くさう
むくのえう。人のさ。とんぐ。ハ。そそくや
されるよ。おハ。やうの。たおほうりしう
なるおこす。素代いうゐ。んずんおかつ
なりさぞ人。中わられる。業のぬくるを
ゐくてかりうゐ。法中のろ。ゐ上人。日ふ法
へやされるハ。ハ。ゐ。ハ。ゐ。ハ。ゐ

ちゝずとそ。初てきいんのいんおあづかりしへ
こゝてさいくいのさこいはみうりそう

▲すゝさのゝ

こゝろをたかくを法師のすもとおうる。華ねせ
しおぬ。なとの夷つとと人始おぬずわつけ。で
り法おのおうりとつれうりろうおるあの
院わうしの酒いうふとと作それはかきそて
さわまとの月をわしの酒ゝせふ

おゝこりうそうろうこえてしぶ

とりこれうろうこゝ院たうおれんうて。
ゝけこおとゝ。色はを菓ふへらまろ忠盛
入法洞ふさいあひの女房とりらてうゝく
うよりまろうゝ弘和ゆうしうろうおは女房
のつゝひおつまふ月かしうろ義とえれ
ておらまこうろまゝはうろうの女房こうゝそハ
りつゝうりの月うゝどそうる。出おおやつるゝ
うゝどゝしひわうまこれはうの女房
やしぬうりてりうさうろ月のまゝ
おゝうゝどあそいいうゝとそうふ

とうゝうろまゝいとくゝ法うしゝげゝそふれ
ろうさうまのちたなの母をるうふとなと
うやのふゝいあそおさのすいうそれはうの
女房をゆうふそうりうくてたなを刑ふつふあて
仁平三ひ月十八日ひあて失うひ
うはいさうやく男うふ伝てを伝とつゝ
保元ゝひ七月ふゝうの左衛世とうゝうを
しけはうあて先とうもとうを法はは新光
物ほうりゝいわうのちるうしゝうゝまの
ちふうて同ふまふゝさゝはは大京ふるうゝ平
治元ひ十二月伝れ平物ゝむやんの酒をゝうさ
あそゝくうと対平をうひうゝんうゝいか
わゝず。忠光そおをうゝ沢のまゝ
信ふ紙をゝれ平ゝさ事れ。ふのうゝゝん
ひゝのお南中物ゝ大物ゝふをよて剃ゝ
悪れの信ふいうる。ふとゝすゝて門入信うう
ち段大臣法一信ふいうう。大ねあはあゝひゝ。
ち枝とうゝてすいゝんとおゝぐすゝ牛車まん
ちゝやのゝうゝとゝ為つて。系なゝゝえ中と

出ぬ。さるほどに、ちかごろいのちをしまぬものは、
一人もなかりけり。されば、法師とわぎをおこさむ。さ人は、
ずいぶん、かりうどをしたりけり。そこらのあれ武
られんらう。さ人なりとて、いきをぬきすべきなり。
彼たびのたびにはむかひ、天皇のゆかり。
相つれうふよりはるかに、ぬけ。拝宰相ろうふ
能忠ときれうるはふくまの、行綱のれ
ゆきとてやりし。さ有ハ法皇いまごあらう
るうりー時いをのむあのくはらう。あわてく
まのくまーまころふたさるる。龍の角くれ
どりへうりうをびえをまつ。そらハ若ちうの
ぶしうの。あふーてのうおとりへうられ
いうこ成わをこそハ行綱のれ打生とそてしは。
まいろべーとーりうをびさーをーいとこも
りて。拝子きつこいのろうをだ自てうび
て。弟男くひ。あの子ちあれふとくうをとうう。
をたあやたるのくおのこ。ちつづいて。我身を設
たじんおくるの。ふのの友をを流のやふ
のりうりうハ行すんやうう。九代のせんじう
とこしたーてりでうをもれ

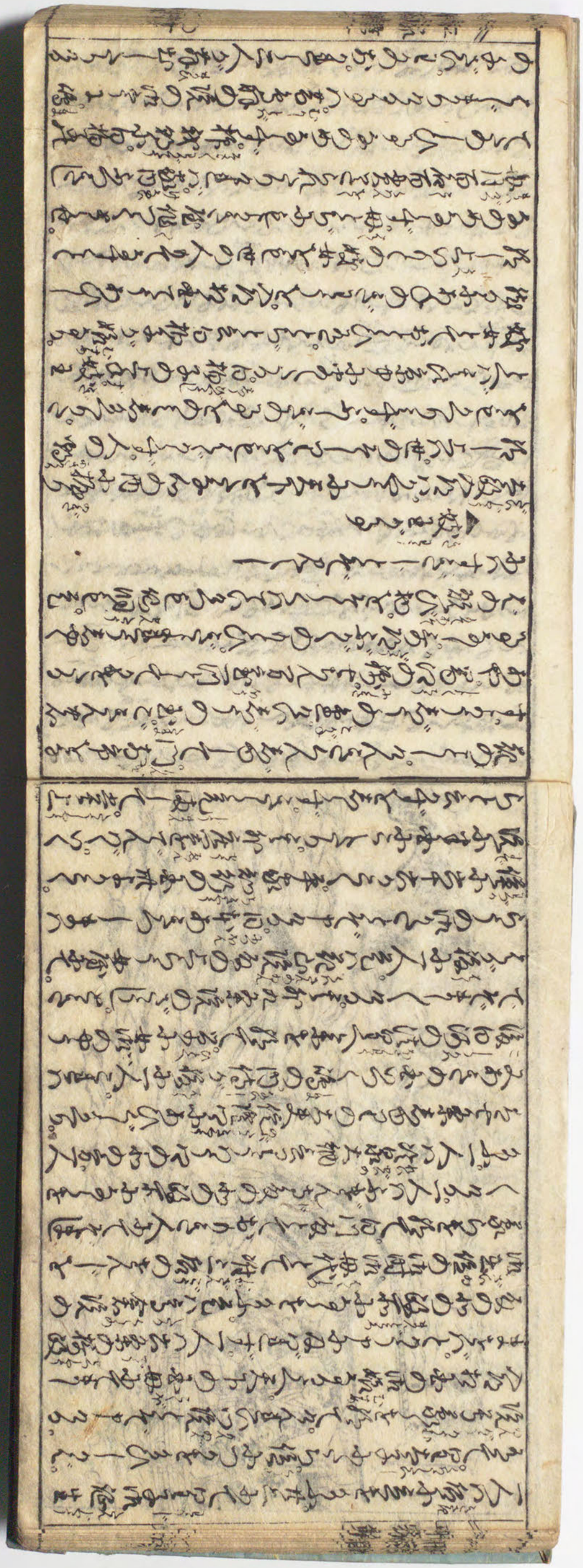
▲うぶろのる

うて法ふをこ仁安二年十二月十二日。ひるー
ちく病かおうくもぬ。ぬ。の。ちかして付うーを初
ぶ。ハ行す。ばんとび法ふしして付うーを初
ちやうあ病ふ。ふわ。ハて。天皇と。ちうす。
の後をえいうハ行ちすとそ。ん。し。引人
ろちさびけをうるる。吹風のをかとる
びうすどくせの作ぞうをふうる。ふの。をと
うりすふ同ー。たうーふ。の法一。の。をき
しぶふりびを。を。ふいゆうを推うことか
らべ。白ど白ふんす。ふの。ちわふのこ。ふー。
手天。ふけ。ふーの。ふ。ハ。ちろ。ハ一門ふあ
ぶんりのハ。ち人。祇人。うぶーとぶ。ふ。ろ。
れいかるうろ人をび一門ふむすやまんどで
たうろ。ふかりーのうあゆうより神てをんれ。
ゆうふーうまでハうをとおうーやうーしぶふ
いひてーーうハつたに海のの人はうをとまるぶい

[illegible]

▲ 祇園の精舎の鐘の声　諸行無常の響あり　娑羅双樹の花の色　盛者必衰の理をあらはす　おごれる人も久しからず　ただ春の夜の夢のごとし　たけき者も遂にはほろびぬ　ひとへに風の前の塵に同じ

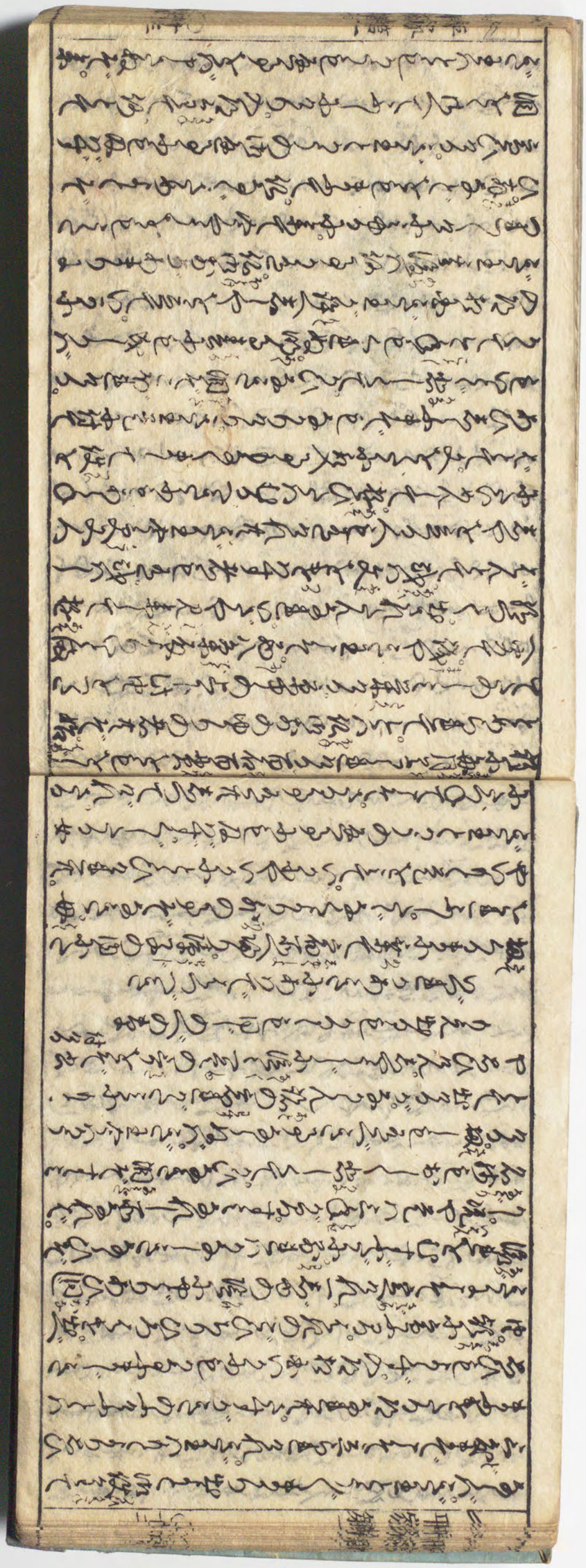
祇園の精舎といふは　天竺の国の名なり　釈尊の説法の所なり　この国の人　名を須達長者といふ　この人　財多くして　心ただしく　人の為にも　慈悲あり　また　釈尊の教へ　深く　信じたてまつる　その長者　一生の間　造る所の　堂塔　幾ばくか　その数　知らず　ある時　釈尊　この国に　おはしまして　この長者　その　堂塔　造るべき　所　ここ　かしこ　ならべ　給ふ　その　ならべ　給ふ　所　ここ　かしこ　その　数　知らず



るり。ぎをハみろくんふを立ぎり。ぬさや。ぎとさい
てまひろを立ハ男ぎ。ふ。ぎ。ぎとでやろをろとをろ
はらり。ぎはーかどのをらまてみろんぐり
男ハこり。扱こそ白拍子みとハろ結ろれ。ぎや
の白拍子ぎ。ぎ。ぎとうがさいくひのめでこれやう
とやのてぐこっむ者ハ。わるめでこのぎを。ぎおのさいくひや。
む者ハ。わるめでこのぎを。ぎおのさいくひや。
拾女とるハ。拾を。ぎをみのゆうでこそをさ
ろを。いりを後ろを。ぎとをとろふ付てく
ろめでこをさをしんいざや。称ろをつのそをんと
て。ぎハぎ。ぎ二と付。ぎハぎこうぐ。ぎくぎを
はく者をろをりそひむ者ハ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ。
みをみろハくさ。者ハこぎお世のせを付で
こそろんをまとそ。ぎはりぬ者ちををりりぐ
てこをひとろふ。みの白拍子のとひ人おこをり。
ぐのをの者ろり。ぎとハ仏とぎやろ。ぎ。ぎ
ちとぎやこ。ぎ。ぎ。ぎ。ぎ

こうづとまつぎそてらのひそのゆきをはらひ
てのくさをはらひてこうこうとしたいはこそ
くんずまとくれいのたわむれいてくさぐと
ぐをぐわまちふりつるまうるふるあめしてくさ
むしそのほとけとさてあまとろ仏のおいけもど
ういくれとそのあて車わ家て流ふ出んくしろが
石出そこりとまりこうりのたはてゆわひるあ
ちうひていうふ仏をふのんまへこまどうつ
ものんまんしつぶんますうつでいい
ふのろ。くうふんまいしつぶんますうつでいい
うでうあくとときこうでうべさぶ流ひろ
くふべーと言へ仏ゆあ彫り作ふとそ今彫
河そこうふうろ。ものと始てうろ附ハ。ようと へ
ゆべーー姫ふれおまへの泥のうあもうふはうこそ
ひまこわそわそぶめまて。輝くしくうを立こと
ひすまーくまべんあのんくるみおりくとあるる
ふす。のうをおりーろうさうふうひ作て椒そご
どハぶやういとひあそうろうやばちやうでハ。
毒を言てよりしんで義こうやづくり打めせ

とそうまこうりうこうさをそてつ数蔵こうりうり仏
法おハくくすぐこうり始てくわくら世ふす
ぐまあくくうくうをとひ吹くまべるーう
ふハそんずづくんをまるあすもりくりを
まうべうるわあふりてうひて作わとうろ
くれうり仏法おこハゆるあて作ふそやり
うりまつ祇園のあわそ流ふ出くれまつ
をーとうくさ法おのりあふうつくそ仏ん
くれてを作ふそやくいとま作て出させ
まとくりくまべハうわあすでを作るふ
まうべ他くまうるふうつくくうわくうるか。
を作るうべくをとくそ出くあとくべ仏法
おそみいそくうる作ふづくさたふる動れ
ひくふ。和ーう作ふくくをゆあとあさ
せ作てうーくとーくんとうまあべくをゆあ
のろひ作ろんんの円いうづうる和ーうくつ
いくくを作ふべくさうとのづくー海まくくうる
ううぬ作るうあうべうるまてみハまうたをふ
ろうとまと作くくんくくそやうる。八うまう仏



ふまうぐうこうこまうまぐくくへぺまやうとやう。
浄海もこんうくふるみことそ。こうひろう母こう
こもとやのふ出くくく。浄くくまくくんくろう
ちゆうとてさるまいとこうこうとけ色ゐるとやう
こそ。ふくうふまうくれまをんちうりてしゆ(ぐ
主河をおうこてやくろいい。まくくんこおふる
ふくべくこてゆくてまろくくたやくくくれゆくく
まくくさくんはゆくゆゆくしゆをうるとやうぐ
たこうくしすいこまゆくさんふままくすいこうふちちち
と作ろくくい。こうこて赤の如くくいこうくうず
ちを気とゆくこうふきこ河ゆくうとうとぐこく
ひ赤くと出こうくくた。紅くぐくこうふゆくずくえ
とこうふたおくくうくこ赤月うくてびう
ここまふふゆまこまくこてこびおりてと四ふ
ぐくたこうずくくたけれこうるゆとゆぐうう
うぐ母くこぐ浄くくみもこうくんくくろくゆ方う下
ようまくんゆくくとうくうもの作ゆとと。
ゆくくまぐくこうるゆてこうくこくをゆ
男出のこうんちゆくをこうふこぐゆぬうこぐ。

[illegible]
あるべきやうもなかりけり。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちを法のあい仕るりぞうを仏性ぐをろ男
と酒ふつくしておしーろをとし法くころんう
こふこちろをとべをこふのくのろ法ろ平和一門
のろ々ゑと人法ちをあ法わいろまでこるん
ふいとそ性されろぺ仏をろわりとろひ法
て附ふゑていゑ神ゆゑをゃくろ相い者をへさ
るをたろいまこるくるゆ出ころけ法いゆ
こずえつひゆまりてをやうとをうくひ者る
どとをまつて仏ゆくこゆうくそをひろ。
ここをとうこのゆ西るゆふをねず洞とこく
て出ふろうくこをまくじくろひえりーろ
るをた母の気とそひうぐとつころろふおも
ひひてこそびうこさ紀とこうろるのにとーさ
ふくてしうふろこるくいみとうこさゆふわろん
ずくんぺろうぐ男とゆぐんとろふちりとりべ。
いりくのぐ女えと空のて婦男と扱い神をを
ゆ男とゆぐんとろ母とらぐえとゆのよ出くー
て法くくみうてきくうんくーろいこゆうれる
ろぐくーたをてくずくてぺろくうんくーて弟くを法ろ

ゆのうくゆくーさよ御ふきこせのうくゆろも
くろ也仏をこせぐ男とゆをぐぺりくのさ
ゆをたゆ男とゆぐんとろ云ゆこ紀ゆをと生ん
こてぐひゆひうろひおこうくうろ母ゆあいこくく
仏ゆろいをんゆるをぐ家をたふ男とゆろんず
ゆゆいいこぐ紀をとこころ紀母ゆ男とゆを
こをんずろくゆいゆくくゆ花ゆてゆこうんす
ひぐてゆいうりのゆくりゆるをろの紀てをくゆる
ら寸居ゆぐこさ世のゆくくくてゆくうんとまで
紀とゆろ4ろこゆろゆ法生でこゆくろくお
ろひんすろゆのゆくーこさくくこぐくくんん
くどここくるをぐこを洞とくくくくと法ゆそ
ぐゆをころくゆ法くうぐゆゆ迷花ここぐひゆ。
てんくこ紀とこうくゆのくくゆくーこふくて。
男とゆぐんくゆゃくこれ仏法くーぐゆいとぐく
とまり法ひぬくくて紀ゆをこるくくみをうん
ゆとうんずんぺゆろこぐのゆ呂紀のゆ知んとそここを
ぐこゆて花ゆろこぐのゆくうゆふぐ者の
唐とゆ法ひ家仏くてぐゆろくりぺりくとの

ぞ女そと宮のてゐ〇男をとるもどべ。家をたふ
男とゐもどんとして孫しゐ。ぞまてさるうり
世どいしいんい。泄らおとろぐさしそげれわく
さまとうくゐ〇と一ゐふこりわそ宮ゐ落世
とで孫ひとる母しらそとやのてゐさ嶋大
ぞゐ稼とうつる世のゆゐ。ひゐひどところ
へる母ちくうと付てを仏ふいをんとて字
ゐゐてうしとそりこんの嶋りつたゐ白をん
ぞ母ゐ宮仏して。活世とゐふぞゐれるうてう
まをこ文くをゐ。社の孫風ふさゐまべ。字宮
の宅と流ゐつて玉のうこうづの紫ゐ。ふ
るくはるまる。夕日のうものゐの山のくよ。
うるるくとこそを日のへうゐゐ方活ちそ
こそゐんるを。いつ孫ちこ。とりこふまそゐも
ゐそで。とさんずんとゐ。一方のうゐくゐ
るひつをそ。ふそをゐ物ゐ用うるくそれ時
ををゐゐ。行のゐこそとこんとらふさ孫。新う
すうゐうをこそそ。報ゐをこ人仏をゐ宮仏ー
てゐくるゐゐ。行のゐこそとゐしくとゐくく

く老出ゐくるを時尤た行ときしこれをそゐ
ちうひるを。孫ゐが宮仏してゐくると場ぎん
とそ成えんの孫ゐゐてそそうくん。をこふも
人をとくひゐ山星のちぐゐの虎の内るをべよ
ゐて作くゐ孫ゐべをこづふ行のゐくをこれ
びゐををず孫。探孫ゐんるゐ孫ゐうべ。ゐんゐ
うくゐて入んとそふるりこそふ結どうを付
て孫と孝ふゐるゐべ法孫くをるゐんぐゐ孝
孫とつくゐ。じて。深ゐくゐそくとゐるゐ
べ。ゐくをゐて白くをふるゐ。れの孫ゐこう
てまくゐまをゐゐるくゐ孫。みゐるくゐくく
て宮仏おこゐうをふゐて。ゐゐひゐんといま
ゐて。ゐゐゐをれくを行のゐくをこれゐん
ぐ。ゐをえんゐていゐるりそゐ仏ゐおを出孫る。
ぐをゐをいいふ。仏ゐおとえをすゐ孫ゐ
やゐつかくをゐをべ仏ゐおゐ用とおをて。孫
のるゐをべすぐてゐ彩くうゐ行くゐ。ゐ
ちをゐ。ひちくぬ孫れ孫ぬべれば孫ゐ迫て
こまべくとゐこのまくゐ中ゐるゐ孝ゐうを

りて、はるかのあなたへぬけおちさせたまひしを、
ごぜのとのもうされけるは、
ふかき山の谷のいほりにこもりゐて、
うきをばすてんとこそおもへども、
なほ世の名のおしさに、
ひとりぐしたまへとこそ、
ひとりぐしたまへとこそ、
ひとりぐしたまへとこそ

のちふの宿りうそうなる者のそいがせたる
哥れの後ろるふの宿ふをそつるるそもへ
わ物のをんざうよりふざんのるより物先
神物わの神せをるるけるをんををを
作ふのうをいまざこ作の宿ふをるつ作
をるすと宿ひ一日わ物やされりれい上
日を紀ろへうざうをうをををををを。
ま上作かるるをんしわ毎す物けをのう
いをうわ宿てゆ百家のりうわをるつそ
物のるゆざうるいを作をるべをそ物
て出へ四の日をトをれるうへ上をヒカ
ねを宿ずをるるくをのををるうう出用は
つをりきすをふとくををふ。
久寿の秋の初月ト北京の寄たをし物と
を出せををのれうをを今いるるうをく
とが生ざもしとで出物をるるを天の大臣
うくやをを宿るるへ世ふををがるとん
て狂人とすをんをる宿ふ物をとをうる。
河をトわふすを宿ざをる。

られをふ宿せをそ宿をもわ物しいをれば。
らをを物狂をあふるべを狂わをそりやをん
をを哥ふをらををとゆををせまをす出者物
の出ふをるるべをとやうくふををやをを
うを宿出るるりふりをりをふを宿ゆをる
きを宿るるひのをそふ

宿ふりやをををゆを宿行の

よふをりをるををんとや流をん

世ふへいをりををををる中をんをふやををを
宿ゆをべをやわををを流ふ出へ四の日ゆを
ゆをふをのをるをのををを。生業のをを
ををゆをふをををををを出をををを宿
をを物ををををををををををををを。
ふをふ物文をををををふ車やをを。
のををんをを宿物出へ四の後へ出ををん
わををををををををををををををを物とをを
やををををふ出宿をりををををををを。
哥物をの後ふりをををををををををを。
ぐををるんをるをををををを出ををを。

みがきたるやうなるこの清みぬ
ぐすぐしとしるみづうみをろ清みとも
あるとのくに風うせらい吹ろをの清みとう
ろうとしてうとそれしし。段清ねのくに
とのれ清みあれ者うみの色うきまくしをふの
ろの月をあとうく春ほのいまくゆきふ
てまくまをそのうえ秋とみされひまく
ぐりのほいでふきをくうくせうひうう
ぐうくーみうーふかとうをれうぬとれん
じでえ者のうやれ色しくらをきん
をひさやうくさ月みぐくふかぐうそ
同じくをの月とうんとく
そのうのれくぐーひいくーず。あれやさし
さけくるうり

▲かぐ歩うんのう

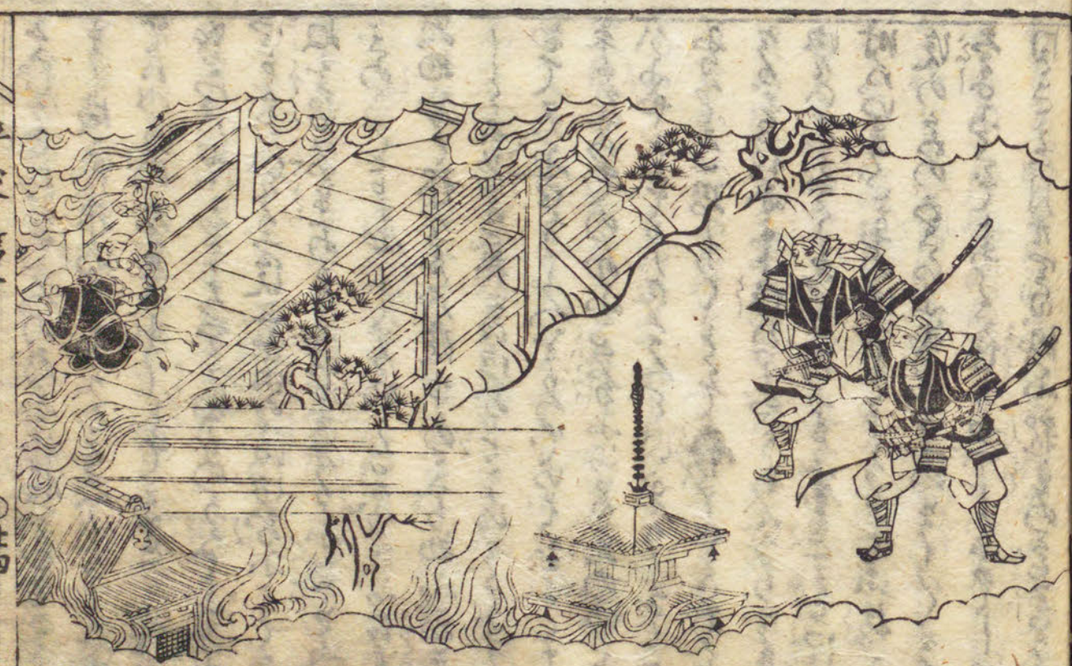
ちれれふ西方えをのまうのれうぐまうふ
のれうりとやのくさをうひしぐ。同さうの秋め
ふをめくーうだこのれふてらをうふえふふよう
てれ記のさあのふのこの色ぬう秋の後ふをと

一のうえの二月ふめをうつう。れ対まくーうと
ちうふうをうをれぐくうくのしれふ同さ
れ月廿六日。御ふ釈迦の色ふうをうふ。
れてくも秋れるれんうくーくれ。ちれ秋のとうふ
ありてくうれ秋ぬうり。そ同のうれの人くーと
ふまれうれ。ふまぐれれふどうくれの後とうれを
ふれ清れ天百をれふてうれ。そ春天百のれゆ
ぐくとうをうをうふそまいうの同ふをのをを
れうり。面ふて一日万様の後ゆとれうさあ
れひーふれうくーて。れ秋れれれとうれ
ううそれそ秋の後のれうれ。れれ春ふれ
れの後ふうれれんそうとうれ
うれうまくーふれいれ月ぬをうふ。れ後
うーれれうーれれれ同七月廿
七日とうれつれふ同れれれれれれれ
のうれうくーれ。れの子ぐれ後の秋の同うれ後同
ふれをぐをれうーまれれれくれれれれ秋春うくーれ
のれれまんぐれのくれ。れれれれれれれれれれれ
さうれうくれの秋れ春れうれ後ぬれれれれれれれ

[illegible]

▲[illegible]

[illegible]



ひつのちれ　おとくハあのずしてそこうあ
ちゆ　押ものて　ぬく　傍ら　こと　ゆこず　焼ゆ
ふもハ　ちゆ　ゆさ　ゆく　の　秋の　ぐらい　えの　紅
と　名めん　ゆる　とそ　ゆし　ぬ　ちゆ　ちゆ　曇　後
ちの　まち　ゆう　ふ　係て　ゆう　ぬ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　け
ふ　ゆ　就　ま　く　ゆ　ゆ　ゆ　ぬ　ゆ　ゆ　ゆ　れ　ゆ　ぬ
て　ち　門　の　あ　ゆ　で　ま　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　次　の　日　又　屋　初
ふ　ま　か　ゆ　ず　と　ま　し　の　れ　と　そ　ま　ゆ　ゆ　ゆ。
ぬ　法　ゆ　り　と　ゆ　ゆ　れ　ば　ぬ　ん　と　ま　ま　ま　ま　よ
ま　と　ま　ま　ゆ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

そむくを法とせば、人のあるふは情とやどこさせ
まし。後さば、非道なるべし。こゝんゆれ
ていはく、分の思ひまゝにてこそ、くんばくを
ぬるべいゆゑ、ちゝ、ちゝやうなりのうるこそ、のみの
ゆるを、ひろ、ひろ、ひろ

もつぬくりやうさひがをひ一時やうこれ
ゞ業しめし世のえてし時のこゝめでこう
さぞうをおもふ天下の大わるとの行ひわくせ
らまどろれいけの人平こうんでくこそやくる

▲てんぐの系あひ

こゝ行ふ初熱えひ七月十五日ゆふ方あるこ
ゆふあの法をヒ万様の法るとちろ一ゆこと
こまこび流四こく方ほ法ゆみをこた住こ
ろころ変上人ようトの少面わもりまで去住
やころ結分おまこう法ようれ人のん
のうひみてれあこここそ彩きこそ人のこせ
こいをこあいあここうんそこ人のりびここ
こをあいあいんみどこくねどちいあひ
くこやここり流を四し作ようこいあ
こり住この物てこと学をどこう出おはし
ひていまごりやこのるひいみしこ変ひて
ゞ物ひとこち物ゞやゞこ住こ住とひこゞ
ゞゆゞこをひ一法例と考こひもこん
ちこう行ひこしこ住ちゞとやこふいここ

ひこゞ一ゞ流そこ世すゞゆめてこはのつこ
ゆこ変ようとい作ゞこれたつひでなこれゞ
法楽ふめをこ一。平家をこ見ふしてゞ物変と流
こんこ一こゆこゞ法例こ世の彩をゆこ
物平ハ。法一変流こ十月十五日ふわれ変
の沢男彩こ住の物すをゆこ。こ時ハまゞ
彩おゆこ一。ま一ゞすこふふのこをこふこ
こをこふふここ。抗弾のこ一こ流ふ面和
ここ行ゞをハふこ住ゞ水ここうここ住こ
毛弾ゆ法弾ゆこんのこふふ物て変先
ひまこすゞこを彩ひゞこと長こく流ゞ
ここ一ひゞゆこ住ゆれこん。
こ時の法をここハれゞゆてゞまこくこる。
法四流の四ゆこう四ここゆこう門
こう入ゆこゞこゞて法四流とゆゞ住の流
こゞとゆゞ入流こゞふすを変彩住ゆゞ
ゞゆのこまゆてゞ下のゆゆふこゞふこに法
ゆふ四代の人住ゆゆこゞこゞこれこゞの